

かち かわ
勝 川 遺 跡

調査経過

春日井市勝川町5丁目一帯は、古くから古瓦散布地として知られており、環状2号線建設・瀬戸線建設・土地区画整理事業を契機として、昭和56年から発掘調査が始まった。本年度までの総調査面積は24,200㎡にのぼる。その結果、鳥居松段丘面の南西端近くに位置する本遺跡は、南に広がる沖積面を含み、Ⅰ期：弥生時代中期、Ⅱ期：弥生時代後期～古墳時代、Ⅲ期：奈良時代～平安時代（勝川廃寺）、Ⅳ期：江戸時代（下街道沿いの宿場町）という大きく四時期に分けられる複合遺跡であることが明らかになった。便宜的に立地と字名をもとに上屋敷地区・南東山地区・苗田地区の3地区に区分している。本年度は上屋敷地区（89A区・89B区）と南東山地区（89C区）で調査を実施した。

A区

従来の調査成果から方形周溝墓の検出が予想されたが、南東端の端SD01から弥生土器が1点出土し周溝と考えられただけで、Ⅰ期からⅢ期の明瞭な遺構は確認できなかった。

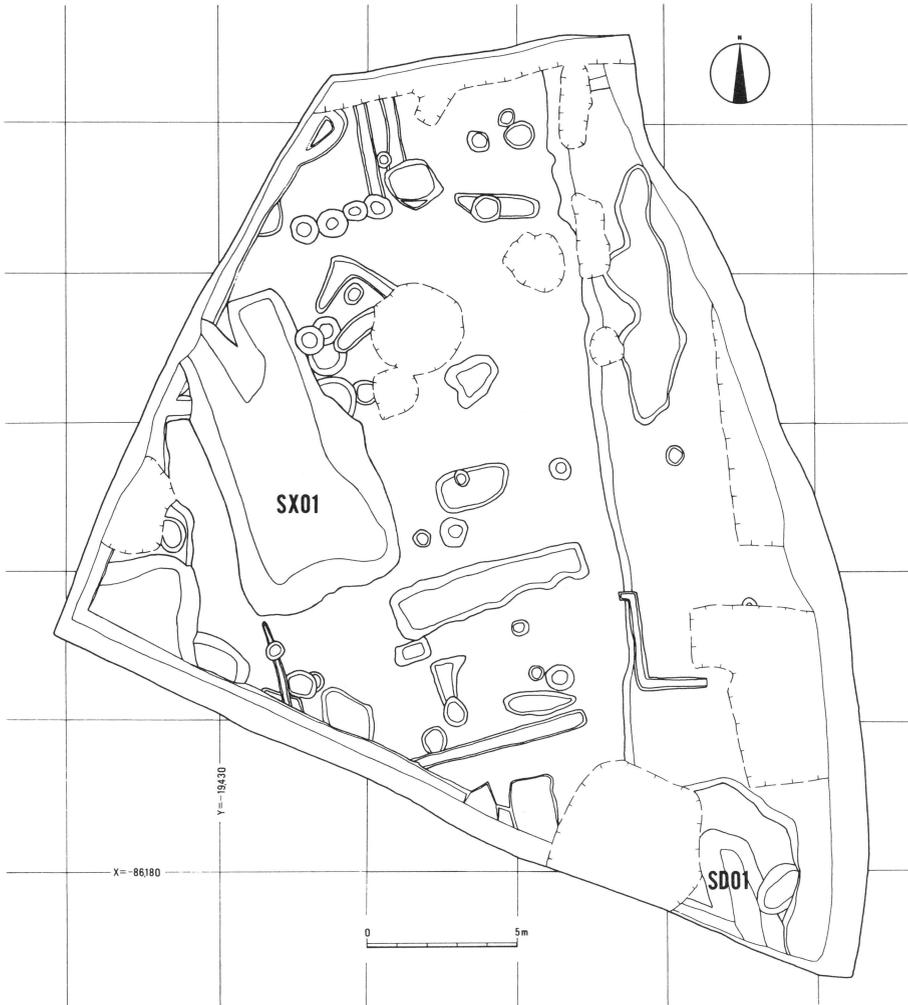


第1図 調査区的位置

下街道からかなり隔たっているにもかかわらず長さ7m、幅5m、深さ1.7mを測る大規模なⅣ期の廃棄土坑S X01を検出した。コンテナ約200箱分の遺物が出土した。その2/3は19世紀のものであるが残る1/3は布目瓦で、軒丸瓦が59点、軒平瓦が63点見つかった。珍しいものとしては緑釉の硯が2点あった。これら多量のⅢ期の遺物はⅣ期の整地に際して邪魔になってまとめて廃棄されたものであろう。



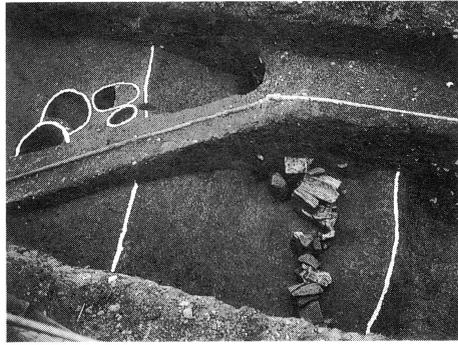
A区全景（北から）



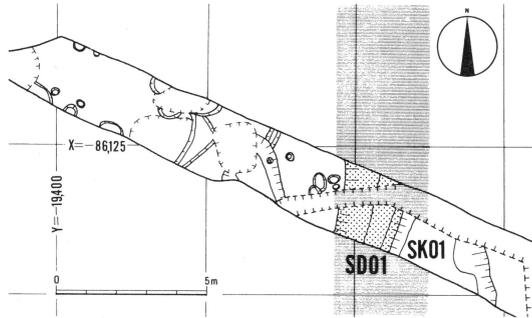
第2図 A区遺構配置図（1/250）

B区

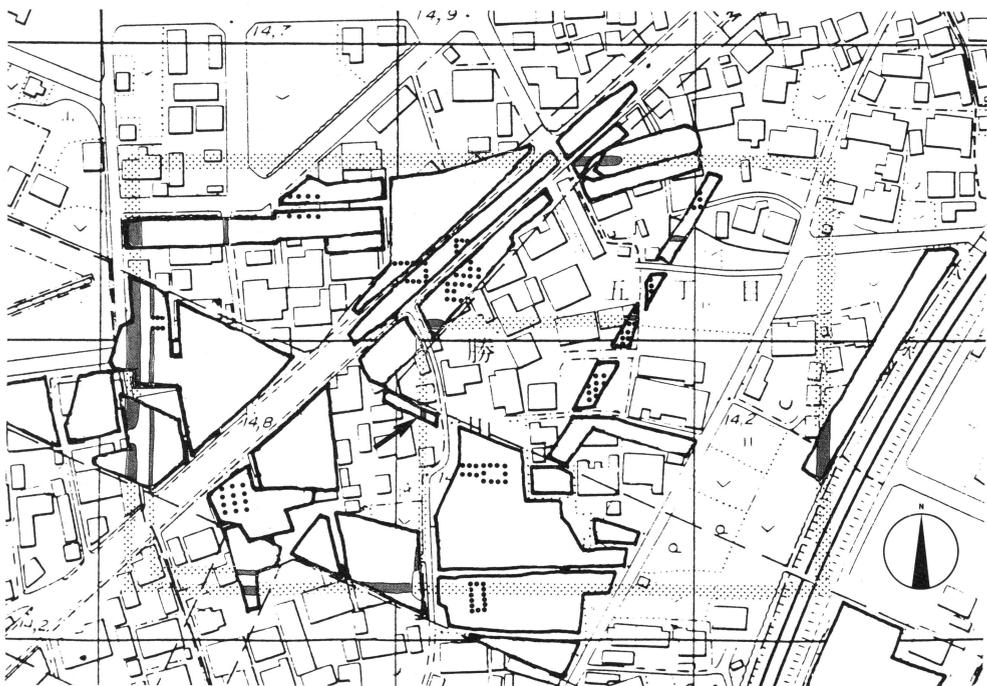
長さ20m、幅3mの細長い調査区である。勝川廃寺の寺域内を区画する南北溝を推定位置で検出した。溝は幅1m、深さ0.5mで、二次堆積ながら底から瓦が列をなして出土した。この溝の東にⅣ期の廃棄土坑SK01があり、江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器の良好な一括遺物が出土した。廃棄土坑が下街道からすこしはなれて検出されることは、街道沿いの家屋の裏に掘削されたものだからであろう。これらのほかにも溝や土坑を検出した。遺物を伴わないが、埋土からいずれもⅣ期の遺構と考えられる。



B区 S D01 (南から)



第3図 B区遺構配置図 (1/250)



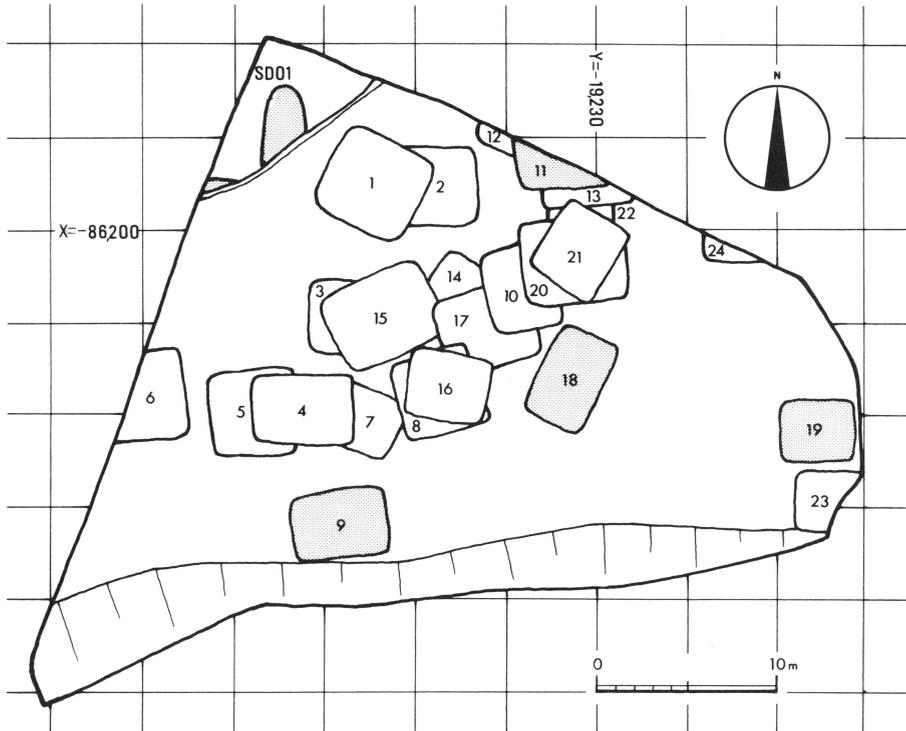
第4図 勝川廃寺関係遺構配置図

C区

昭和59・61年度の調査で弥生時代の多数の掘立柱建物や木製農具などの未製品の貯蔵施設が見つかった苗田地区を見下ろす鳥居松段丘面の縁辺部にあたる。一辺が5～6mの方形の竪穴住居を二十数軒検出した。弥生時代中・後期の土器が多数出土している。苗田地区で生産活動をした人々の居住地をここに求めることができよう。弥生土器の他に須恵器や灰釉陶器、瓦を伴うものがあり、数軒はⅢ期の奈良～平安時代に属すと考えられる。溝SD01は幅2.6m、深さ0.3mを測り南北方向にのびる。

まとめ

今までの調査から、勝川Ⅰ期の居住域は89C区の北東100m付近を中心とすること、62J区SD22と63B区SD01が環濠である可能性が高いことなどが指摘されてきた。しかし89C区で検出した竪穴住居がすべて環濠の外にあったことになるので、再検討が必要であろう。(松原隆治)



第5図 C区遺構配置図(1/400、アミはⅢ期の竪穴住居)